

加越国境を越える道

鈴木 景二

はじめに

道の歴史、古道・街道の面白さ

古代の道のルートを探る 古代北陸道はどこか。

中世～江戸時代の道 古代の道を踏襲する。

史料を読む 紀行文、道中記や案内記、絵図ほか

歩いてみる 北陸道（北国街道） 京～福井～金沢～信濃

* 東海道・中山道、熊野古道、四国遍路などのように…

あわら市域のおもしろさ

福井県と石川県（越前国と加賀国）の境界の山がある。吉崎御坊も。

* 823年までは越前国坂井郡と江沼郡の境。

両地域を結ぶ2本の主要道が通り、その山越えの峠路がある。

それぞれが古代の主要道であることを示す地名がある。

境界地帯のあり方を示す。

1、道の歴史

古代交通史では七道を中心とする官道のルート復原が主流。

古代の官道⇒古代国家が中国に倣って中央集権制のシステムとして作った道

直線を指向して大規模工事が行われた。（新幹線・高速道路）。空中写真や旧版地形図など。

地域社会の道は？

昔からの道⇒豪族の中心地相互を結ぶ地形上の便利なルートの道（いまの在来線）

官道に利用された部分もある。

おおむね後世に踏襲される。交通路に関する地名が手掛かり。

2、道と境界の地名

【峠】「峠」は日本で生まれた漢字（いわゆる国字）。「とうげ」は平安時代になって生まれた言葉。「手向け」に由来するとされる。奈良時代にはまだない言葉。「タケ」とも。

【坂】傾斜路よりも広い意味。≡交通路上の境地帯。坂井郡 坂中井…。

坂のそれぞれの属性による呼称。

おおさか 大坂 主要な交通路の境界。

みさか み坂 神聖性に面からの呼称

くまさか・すみさか 隈・隅という面からの呼称。

「～坂」「～坂峠」の地名は、古代の地域間交通路の峠路であったことを示す。

*クラ、ウスイという言葉も関係するらしい。

中世には「沓掛」など。

越加国境の坂 二本の古代道があったことが分かる。

江戸時代の北陸道に「大坂」の地名。

牛ノ谷峠の道沿いに「熊坂」の地名。『承德本古謡集』（1099年書写）の「気比神楽歌」に「熊坂」が詠まれている。越加境界の熊坂の可能性が有る。

3、越加の道の境界

県境の双方に「熊坂」がある。境界を挟んで同じ地名があるのはなぜか。

他地域にも類例が多い。境界は元来、幅のある地帯だった（柳田国男・折口信夫ほか）。

熊坂は境界地帯。いずれにも属さない空間。

境界は神のいるところ。通交する場合は儀礼（手向け）をおこなうことがある。

（峠の祭祀遺跡）。伝説を持つ巨石などがある。腰掛石、くら懸け石、鏡石など（後に峠の地蔵になる）。宗教的な空間として伝説が残る。

各地の熊坂に、熊坂長範の伝説がある。真宗高田派の拠点が。

宗教の拠点などが置かれる。吉崎など。

この地の熊坂もその典型的なところであるうえに、『承德本古謡集』により平安時代までさかのぼれる可能性を秘めている点で興味深い。旧峠はどこ？

4、古代北陸道を探る

二本の道は古代以来の主要交通路。古代北陸道のルート復原と関係する。

古代官道のルート復原の材料。『延喜式』（927年）に記される駅の現在地を探して繋ぐ。

越前国：松原駅・鹿蒜駅・淑羅駅・丹生駅・朝津駅・阿味駅・足羽駅・三尾駅

加賀国：朝倉駅・潮津駅…

越前国の駅名は、いまの地名にあたるものが少なく、不明な点が多い。

三尾駅は、あわら市御簾尾（御簾尾遺跡）とする説がある。

正倉院文書に『延喜式』に無く、それよりも古い駅が知られている。

天平神護二年（766年）の「越前国司解」に「桑原駅家子戸主丸部度」。

あわら市桑原がその場所らしい。

⇒手掛かりとなる要素をいかに組み合わせるか。

- ・二本の古代道との関係。いずれか一方、または移行した可能性も。
近世の北陸道沿いに、細呂木阪東山遺跡が見つかり、「津」であることも分かった。
この道が古代の道であることを裏付ける。
- ・桑原駅(766)と三尾駅(927)との関係と位置。同じ駅の名称変更か、別の地点か。

赤澤徳明氏の注目すべき見解。製塩土器、人面土器の出土する官衙風遺跡が古代北陸道に関連する(駅家)可能性(昨年のご講演。『高柳遺跡』2)。

加賀国域では、奈良時代の官道は内陸を通り、平安時代に海沿いの道に変更されたらしいことが分かってきた。淡津駅(長屋王家木簡。奈良時代初め)と潮津駅(延喜式)の事例が典型的。最短距離の情報伝達から、航路とセットになる物流の道へ方針転換。

以上のような研究状況をみると、三尾駅の位置がポイント。2つの案を考えられる。

A: 三尾駅が御簾尾なら、桑原駅と近接し、熊坂ルートに沿うので、古代北陸道は熊坂ルートになる。両駅が近所で移動したのはなぜか。

B: 三尾駅は御簾尾ではなく、芦原温泉の方に考えて近世北陸道に続くと考え。

その場合も桑原駅は、現在の桑原であろうから、奈良時代は内陸ルート・熊坂=牛ノ谷峠の道で、加賀と同じように平安時代に沿海航路との接点(細呂木阪東山遺跡など)のあるルートに、官道を変更したと考える。ただし、三尾駅の手掛かりがないこと、御簾尾遺跡をどう位置づけるのかも問題。御簾尾遺跡が桑原駅ということは考えられるか。

5、現地を訪ねて 古代以来の峠路の故地。

近世北陸道は、部分的に古道と文化財が残る。おおむね古代ルートと同じであろうが、細呂木阪東山遺跡が定点となる。

吉崎道も面白い。嶋谷山の切通しは、やはり見どころだと思う。

中世・近世の史料を参考に楽しめる歴史の道。

松尾芭蕉も『おくの細道』でこの道を歩いたはず。(曾良随行日記)

牛ノ谷ルートの古代以来の峠はどこか。

現在の車道は明治8年(1875)から工事が行われた道(『石川県史料』1、p238~)。

『金津町坪江の郷土史』(金津町教育委員会 1985)には、現在の車道の東側に並行する山道が、本来の道であるとする。

しかし、旧版地形図などを見ると、明治に切り下げたとしても、もともと谷地形であったように見え、現在の山道よりも低かったように見える。

やはり、現在の車道が古代以来の峠道ではないか。

→江戸時代の測量図がある。

* 石黒信由「三州測量図籍 野帳」(江沼郡) (文政4・1841)。財・高樹文庫所蔵、射水市新湊博物館保管。

⇒現車道のルートが元来の道であったことは確実。したがって、それ以前のルートも同様であろう。

むすび

古代北陸道の追求へ

江戸時代の道中記などのさらなる探究

歴史の道の魅力の再評価へ。

